

(要約版)

「酒餅論」をめぐる江戸後期の酒と菓子

助成研究者 畑有紀 ((名古屋大学大学院) 日本文化史)

1. 研究目的

本研究は、酒と菓子の優劣争い「酒餅論」を主題とする黄表紙、滑稽本、錦絵などを取り上げ、物語に描かれる酒や菓子の種類、産地、名店などの分析から、酒や菓子に関する情報が如何に作品に反映されたのかを考察するものである。「酒餅論」作品に描かれた酒、菓子の情報を通じて、どのような酒や菓子が好まれていたのか、当時の生活における嗜好品の位置付けを明らかにするのが目的である。

「酒餅論」は、室町時代から明治初期にかけ、仮名草子、黄表紙、滑稽本、錦絵など、さまざまなジャンルの作品に取り上げられた主題である。食物の優劣争いを描く文芸作品としては、酒と飯の「酒飯論」、酒と茶の「酒茶論」などがあるが、これほど長期に渡り、繰り返し取り上げられたテーマはないのである。

なお、「酒餅論」作品のなかでも、特に江戸後期の作品には、酒や菓子の種類のほか、実在した産地、名店が数多く記される。このことから、「酒餅論」作品を詳細に読み解くことは、当時の人々の酒や菓子に対する認識を解明し、食文化と文芸との関係を明らかにするための手掛かりになると考えられる。

そこで本研究では、江戸後期の「酒餅論」作品における物産情報の分類、データベース化を行うことにより、当時の人々の食物に対する認識とその社会を明らかにする。また、「酒餅論」作品を通じた菓子、酒の嗜好分析を行うことで、歴史研究にも繋がる可能性を追求したい。

2. 研究方法

本研究の方法は、主として文献調査であり、次の二点に大別される。

(1) 「酒餅論」作品のデータベース化

国内の各機関に所蔵される「酒餅論」作品を調査し、その内容と作中に用いられる用語を一覧表にし、分類を行った。江戸後期「酒餅論」作品は、擬人化された酒や菓子が合戦を繰り広げるといったものがほとんどであり、これらの作品に見える擬人名は、「伊丹之助諸白」、「船橋入道羊羹」などのように、酒や菓子の種類、産地名、店名をもじって作られている。そこで、分析の対象は「酒餅論」作品における擬人名に限定した。

（２）酒や菓子に関する資料との対照

上記（１）で作成したデータベースに基づき、酒や菓子を題材とする見立番付や絵双六のほか、酒や菓子の製造関連書、料理本、当時の日記や随筆などとの対照を行った。これにより、酒や菓子に関する知識のうち、どのような点が文芸作品に反映されていたのかを検討し、これらの酒や菓子に対する当時の人々のイメージ、生活のなかでの位置付けを考察した。

3. 研究結果

以上の研究目的、方法にしたがい、江戸後期の「酒餅論」作品に描かれた酒や菓子の擬人名を一覧化し、そこに用いられた酒や菓子に関する語について、同時代のさまざまな資料を通して検討を行った。その結果、次の三点が明らかとなった。

- （１）「酒餅論」作品に見える、酒に関する語は、酒の種類、名店、産地など多岐に渡る。これらの語が当時の見立番付や絵双六に頻繁に表れることから、人々に強く意識されていた語が「酒餅論」作品にも用いられたと考えられる。
- （２）「酒餅論」作品中の菓子に関する語は、菓子の種類に関する語がほとんどである。それは、江戸時代後期、砂糖は未だ高価であり、当時の生活のなかで認識されていた菓子は限られた一部の種類であったためであろう。
- （３）特に酒に関する語に関して、「酒餅論」作品には、江戸時代後期に一定の認知度や人気を博した灘酒が見られないなど、最新の情報が反映されていない。よって、これら「酒餅論」作品が、広告としては使われなかった可能性がある。ただし、「酒餅論」という主題そのものは菓子屋の引札に用いられており、「酒餅論」と広告の関係は、未だ検討の余地がある。

なお、当時の人々がどのような嗜好品を強く認識していたのか、または評価していたのかという点について、「酒餅論」作品から読み取れるのは以下の事柄である。

酒に関しては、「酒餅論」作品や見立番付において、制作当時、多く流通しており、味に大きな問題のないはずの灘酒よりも、伊丹酒や池田酒が重視されている。このため、人々は灘酒とは違い、「伝統ある」伊丹酒、あるいは、「流通量が少なく、希少価値の高い」伊丹酒をよい酒として捉えていたと推察される。すなわち、人々は「伝統ある」こと、または「希少価値の高い」ことを、よい酒の基準としていたのではないかと考えられる。

また、菓子に関する語は、羊羹や飴菓子ではなく、饅頭や安倍川餅、大仏餅など、より安価で身近な菓子が大半を占めており、実際に手の届く菓子が、文芸作品中でも好んで用いられたといえる。